



むかしのことをもっと知ろう

やくわり

「宮川の河川の役割」



田辺堰（旧宮川） 今橋より上流を望む

宮川とは

中洲地区の真中を流れる宮川は八ヶ岳赤岳と入笠山を源とし、諏訪湖に流入する河川の一つで、上川について2番目の大きな河川です。昔の人たちがどのように河川に向かい合ってきたかを学びましょう。

平成30年7月

田辺堰（新川）改修委員会 中洲公民館

■ 1. 江戸時代の高島藩は水田を広げることには力を入れた

高島藩は、人口やお米の石高を増やすことが必要と考え、そのために稲作を奨励し、災害を少なくするための治水事業に力を入れました。

1) 諏訪湖の出口開削により諏訪湖水位を下げ水田を増やす。→①

2) 氾濫をひんぱんに引き起こす河川の改修工事をおこないました。

・宮川筋 取りこぼし川の開削 →②

・宮川筋直線化工事 中洲、湖南 →③

3) 水田に水を引くため農業用水路を開削し、開墾を進めました →④

茅野市；1785年滝の湯堰10.4km、

1792年大河原堰12.5km

高島城を造ったのは豊臣秀吉の家来の日根野高吉

高島城を造ったのは豊臣秀吉の家来日根野高吉で、安土城や大阪城の築城に携わった土木技術者です。

日根野高吉は、文禄元年(1592)から慶長3年(1598)にかけて、高島城のある諏訪湖畔の高島村に新しい城を築きました。諏訪湖と数条の河川に囲まれており諏訪湖の水を湛えれば水を守りとする難攻不落な水城でありました。

地盤がやわらかいため、高島城の天守の屋根は瓦ではなく、檜の薄い板を葺いた柿葺という珍しいものでした。柿葺であった理由は、諏訪の寒冷に耐えられる瓦が調達出来なかったためとも言われています。

また、築城当初は自然石を加工しないで積み上げた野面石積みで、下金子にあった金子城の多くの石を使っています。

江戸時代は諏訪湖の湖岸線がだいぶ変化しました。

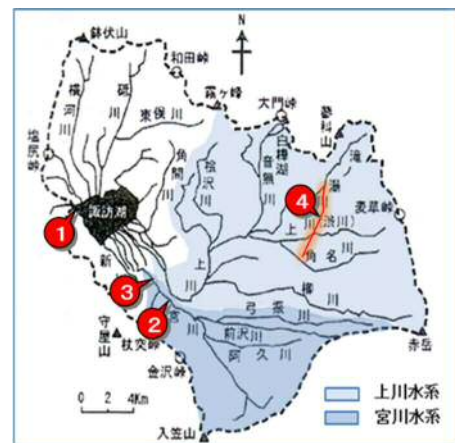


図-1 諏訪湖に流入する河川



写真-1 高島城

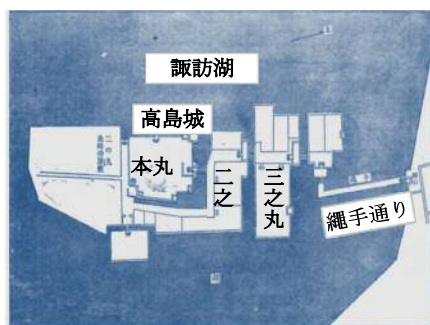


図-2 諏訪湖の中に造られた高島城

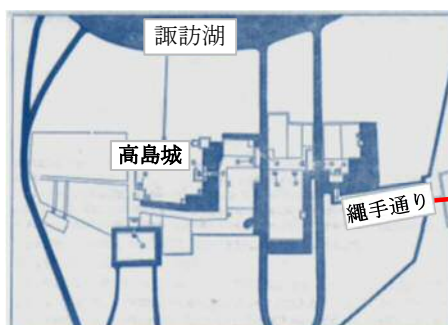


図-3 高島城と諏訪湖 (明治7年に作成)



写真-2 現在の縄手通り
ケヤキ並木になっているす

■ 2. 諏訪湖の出口を開削し諏訪湖の水位を下げる工事を実施

げんろくがねん 元禄元年（1615）に高島城に帰ってきた藩主諏訪頼水は、稲田を増やそうと諏訪湖の尾尻（現在釜口水門のあるところ）の右岸側に幅7.2メートルの新たな水路、満水堀を掘りました。これによりできた弁天島は、幅18m長さ109mで弁天社があり農家が4戸と畑がありました。図-6には家が描かれています。こうした治水事業で諏訪湖の南側（現在の豊田地区）に「阿原」（葦などが生える低湿地）の開拓が進みました。しかし、大雨のたび、諏訪湖があふれ災害がひんぱんに発生したことから元禄2年（1689）に弁天島中央部を掘り下げ新堀を整備しました。これにより「浜中島」ができたが、それでもまだ諏訪湖の水があふれる災害が続きました。

浜中島の撤去

天保元年（1830）に、当時22歳の伊藤五六郎は、高島藩に浜中島を撤去する案を提出し許可を得ました。浜中島を掘り、その土を有賀村近くの湖岸に運び埋め立てをし、五六郎田圃と呼ばれる約六町歩（6ヘクタール）の水田を作りました。当時は大工事で延べ1万6千人と1カ年を費やして、天保元年（1830）12月に完成しました。船の大きさは幅3m長さ15mと普通の漁船の20倍もあり阿呆丸と呼ばれました。

弁天島の撤去

明治元年の諏訪湖の氾濫がきっかけとなり見出14ヶ村（諏訪湖の南方に位置する村）は、時の諏訪藩主諏訪忠誠に弁天島の撤去を願い出しました。

天竜川の立木を切ることと弁天島の撤去が14ヶ村の請負事業として行われ弁天島が撤去されました。

1615年に行われた最初の満水堀の工事から弁天島の撤去まで約250年間に出口の断面は約3倍に広がり諏訪湖の水のあふれる回数はだいぶ減りました。

葛飾北斎が描いた諏訪湖の絵

当時の諏訪湖と弁天島が描かれています。この位置からだと実際は富士山が見えないが絵には描かれています

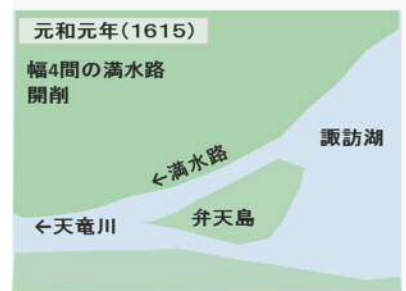


図-4 満水路を開削



図-5 弁天島の真中に新堀開削

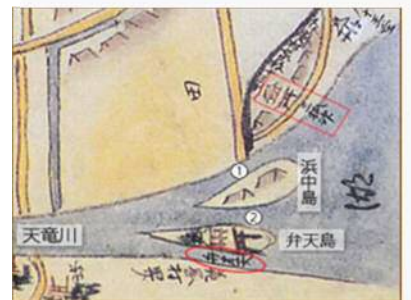


図-6 当時の地図



図-7 葛飾北斎が描いた諏訪湖

3. 河川の氾濫を頻繁に引き起こす宮川の河川改修



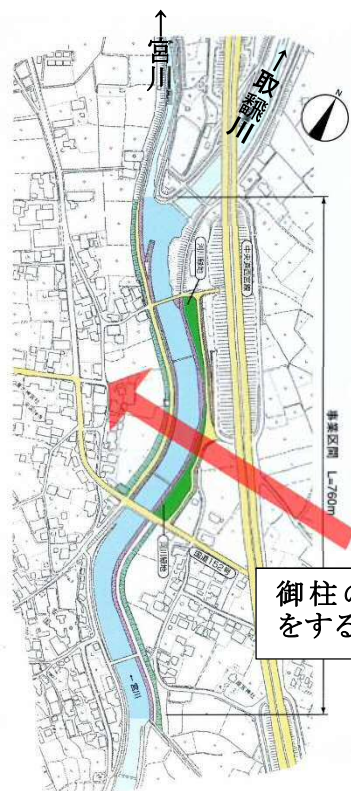
寛延元年（1748）宮川筋の村々が、「宮川は川幅が狭く水はけが悪
いので洪水の時に水を上川へ落とせるよう排水路を開けていただきた
い」と藩に願い出をしました。宮川の水を六斗川（現在の上川）に流
せるよう、安国寺橋下から中河原村と新井村との境にある荒地を掘
りおこして「取翻川」（とりこぼしかわ）をつくりました。

この「取翻川」を作ったことにより普通の川の時水は全部宮川へ流
し、洪水の時に限って七分を宮川に、三分を「取翻川」へ落とすということにしま
した。その後、この「取翻川」の水をどのように流すかが問題になり、上川筋の
人と宮川筋の人の間で争いがたびたび起こりました。



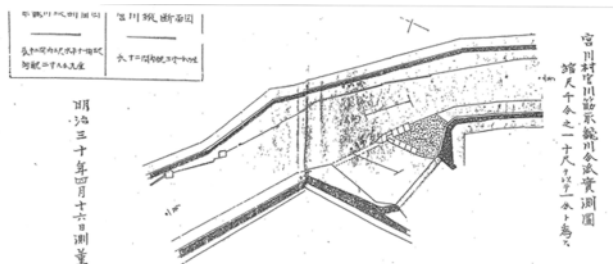
図-8 当時の川の流れ

取翻川（とりこぼし



御柱の川越し
をするところ

図-9 宮川との分流する箇所



川	例	寸法	寸法	寸法
遠見路	中流測上	一 二 三	一 二 三	一 二 三
堤	中流測上	一 二 三	一 二 三	一 二 三
堤	第一測上	一 二 三	一 二 三	一 二 三
堤	第二測上	一 二 三	一 二 三	一 二 三
堤	第三測上	一 二 三	一 二 三	一 二 三
堤	第四測上	一 二 三	一 二 三	一 二 三
堤	第五測上	一 二 三	一 二 三	一 二 三
堤	第六測上	一 二 三	一 二 三	一 二 三
堤	第七測上	一 二 三	一 二 三	一 二 三
堤	第八測上	一 二 三	一 二 三	一 二 三
堤	第九測上	一 二 三	一 二 三	一 二 三
堤	第十測上	一 二 三	一 二 三	一 二 三

図-10 取り決め書につけられた図面

明治30年4月に関係する7町村で取り決めが
結ばれました。宮川の河底の高さより15cm程
と取りこぼし川の河底を上げることとし、普段の水
は宮川に大雨の時は取りこぼし川に多く流れると
いう取り決めがされました。

■ 4. 文化3年(1806)に宮川を直線化する工事が行われました

A 区間 宮川の下流域は勾配がゆるく、川筋は大きく蛇行していたため、頻りに河川の氾濫が起きていました。それを見かねた高島藩は、安定した稲作ができるように享和元年(1801)に60人の大視察団で現地を調査し、宮川の約1.1kmを直線化する計画をつくりました。文化3年(1806)に地元の村に担当区間を割り振り、宮川の直線化工事を行いました。 →図-12 当時の宮川の流れ

これにより水害が少なくなり、生活の安全性が高まりましたが、上金子村の東側に広がる肥沃な水田と集落が宮川を境に東西に分断され行き来に苦勞することになりました。

B 区間

文化元年(1804)には田辺村と下金子村の境を曲がりくねっていた箇所を直線化工事が実施されました。

延長 約270m

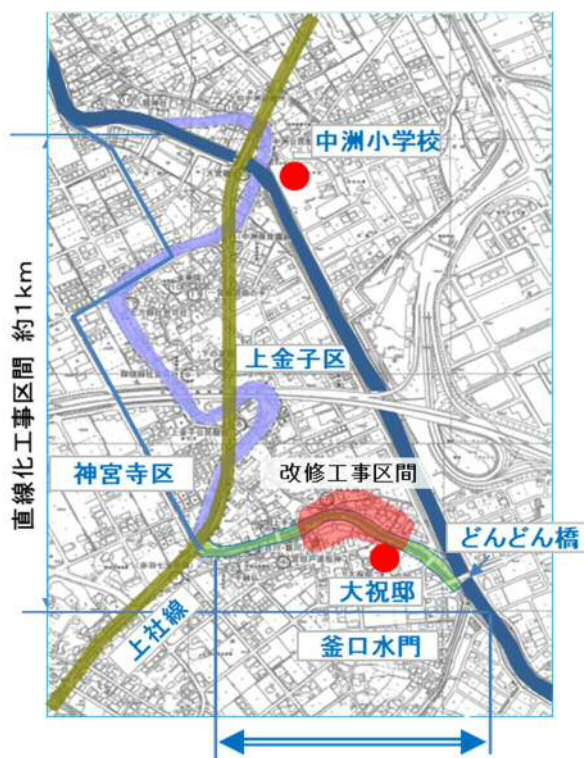


図-11 旧宮川が残っている区間

旧宮川が残されているのは
どんどん橋から上社線まで550mです。



図-12 当時の川の流れ

■ 5. 旧宮川河川敷を利用した田辺堰周辺の整備がされました

江戸時代に高島藩が行った宮川直線化工事により残された旧河川敷を利用して田辺堰が掘られました。その旧河川敷が現在でも残っている区間が県道上社線からどんどん橋上の取水口まで約550m区間です。

そのうち今橋から上流の約214m区間の周辺整備を今回行いました。これによりこの田辺堰の上金子側を散策路として利用できるようになりました。



整備の内容

延長214m 護岸工 L=94m

散策路 214m (上金子側)

幅1.2m~1.6m

植栽 コブシ、ヒメシヤラ他

自然石を配置した休憩所

ホタルの生息地整備 1箇所

木製の橋 幅1.2m 長さ3.6m

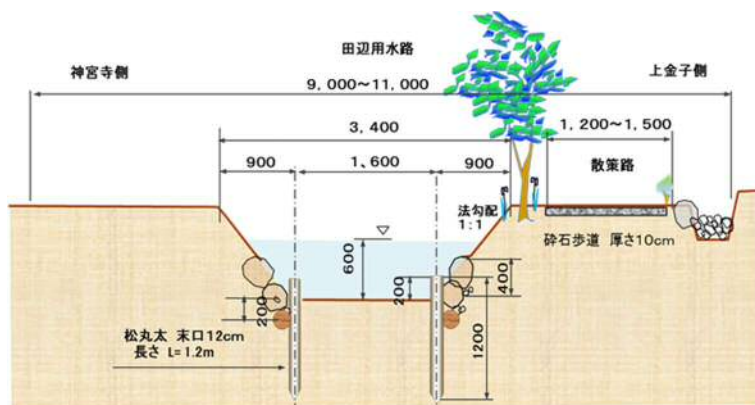


図-13 自然に配慮した護岸工事

計画平面図

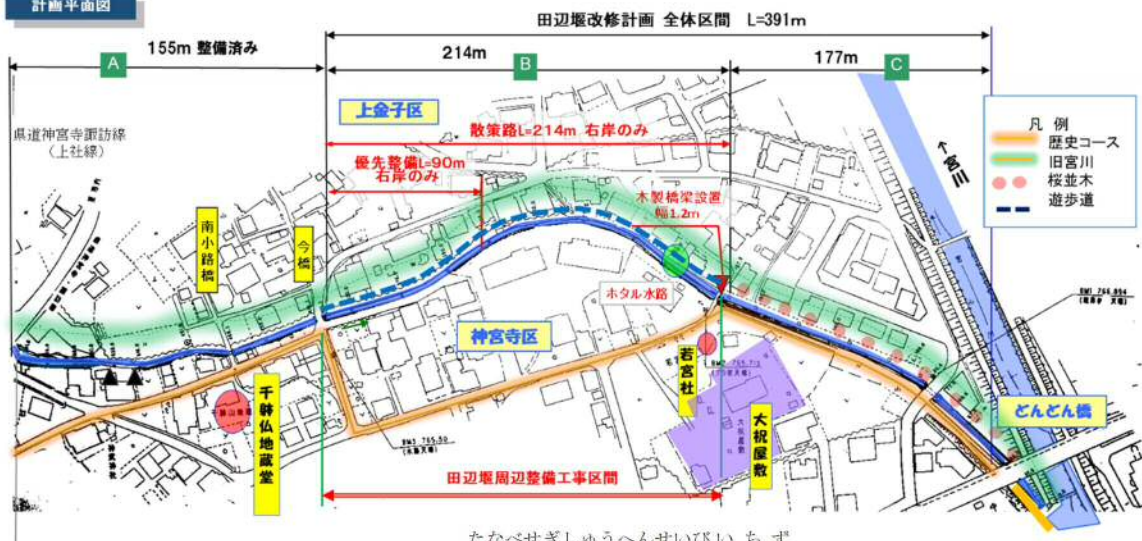


図-14 田辺堰周辺整備位置図



写真-3 住民参加で植栽を実施



写真-4 憩いの場に自然石を配置



写真-5 ぬくもりのある木の橋

6. 「上社の社・歴史の散歩道」田辺堰を歩きながら学ぶことができます

この地域は、諏訪大社上社本宮を中心に歴史的な史跡が残されており、自然に恵まれたコースを散策し楽しみながら昔のことを学習することができます

上社の社・歴史の散歩道



3. 諏訪大社本宮



建御名方神(たけみなかたのかみ)が祀られている、宝殿は2棟あり、御柱の年毎に建て替えられる。歴史的に貴重な文化財も多く、1年中参拝客でにぎわう。

1. 大祝屋敷



中興の大祝(おおほうり)諏方頼廣が居住した。この時から藩主は諏訪氏、大祝は諏方氏を名乗った。

2. 千姫仏地藏堂



その昔、遠くから諏訪大社に参拝され志半ばで亡くなった人で引き取り手が判らない人を埋葬した

図-15 上社の社・歴史の散歩道のコース



図-16 歴史の散歩道コースの一部見直し

これまで住宅地をう回していたコースが、旧宮川を利用した田辺堰に沿った散策路が整備されたことで川筋の短い距離を通ることができるようになりました。

約200年前は、宮川が蛇行し上金子村の肥沃な水田が広がっていたこと、大祝屋敷は宮川を自然のお濠として利用して作られたこと等を学びながら散歩ができます。

大祝について

諏訪明神の拠り所として諏訪社の頂点に位置した役職で、上社大祝は古代から近世末に至るまで世襲され「諏訪氏」を名乗りました。中世までは諏訪の領主として政治権力をにぎっていました。江戸時代に入り藩主諏訪家と大祝諏方家ができ、完全な政教分離がされました。明治維新を経て神官の世襲制度が廃止されるに伴い大祝職も廃止されました。

メモ

This image shows a blank sheet of white paper with horizontal ruling lines. The lines are evenly spaced and extend across the width of the page. There is no handwriting or other markings on the paper.

クラス	中洲小学校	年	組
なまえ			